

---

# 一粒の光

雪合戦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一粒の光

### 【コード】

N3395H

### 【作者名】

雪合戦

### 【あらすじ】

洋二は落下の浮遊感に意識を失い、次に目覚めたそこは地獄だった。

自らの体が空気を切り裂く音。鼓膜では風の雄叫びが始終付きま  
とっている。

瞳では上下左右の識別もつかないまま、俺は暗がり落ちていた。  
しかし、視界だけではなく、突然の意識の断絶。

気がついて体を起こしたそこは、月明かり程度の明かりに照らさ  
れていた。

「よお、やつとお目覚かい」

うすぼんやりとした光りの中、俺にそう話かけてきたのは、中年  
ぐらいの男だった。

「いったい、ここはどこだ」

「ヒヒヒツ、地獄さ、ここは」

禿げた中年はキイチだと名乗って握手を求めてきた。だが、俺は  
白色で滲んでいる周囲を見渡した。

「地獄……ここが、か？」

五円玉の穴を広くしたような場所だった。外周の縁の幅は二メー  
トル、今こうして俺とキイチはそこに立っているのだが、ほのかな  
光が届かないぽっかりとした真っ暗闇が、中央下あたりに陣取っ  
ていて、深い闇の虚空を思わせていた。

「そうさ。いや、俺達が勝手にそう呼んでいるだけ、か」

「……うん？」

俺は疑惑にとんだ顔をしてキイチを見つめる。

「見えるだろ。あの中央のくぼみ。あそこの光りすら届かねえ真っ  
暗な闇さ。底はあるが中身は混沌に埋もれた住民どもがたむろして

やがる。だが、やつらもそのまままで治まる気はねえ。俺たちと入れ代わりたくて、なんども壁を伝ってここまで登ってこようとしゃがる。いわば上と下との永遠の争いだ。終わることなく、ただ少しマシな空間を求めて、互いに領地争いを繰り広げさせる。これが地獄でなくてなんなんだ？」

キイチは面白げに下卑た笑いを上げる。

「ここから抜け出せないのか。食い物とかはどこから？」

「無理だね。ああ？ 食い物お？ そもそもここでは死ぬこともないんだ。腹が減って餓死することはねえよ。常に小腹が空いているような状態なだけだ」

「そうなのか」

「それで、お前さん、現世で何をしたんだ？」

「現世でって？」

呆れた声を隠しもせずキイチが付け足した。

「お前さん、自分が死んだことをわかっていないのかい。死ななきゃ地獄には来れないだろうに」

俺は愕然とした。そうだ、死ななければこんなところに。

瞬間 交差点で自分が車に跳ねられる光景がフラッシュバックした。

ああ、俺はあのかきに死んだんだ。

彼女を殺して逃げていた、あの時に。

「それで、どうなんだい？」

煮え切らない俺の様子に、苛立つようにキイチは尋ねる。

「女を一人殺した」

そうだ。ここは俺に相応しい場所じゃないか。なんだ、そうか。

俺は急な脱力感に襲われ、全てを投げ捨てたい気分になっていた。「そうかい。俺はよ、窃盗、放火殺人、暴行傷害、へっへっへっあとは何だっけなあ」

俺はキイチを無視してその場にうずくまった。もう何も考えたくなかった。ただ、胸の中の虚空に全てを投げ出したかった。

「寝るのは名前を教えてからにしろよ」

「……洋二」

俺は目を閉じて、思考をまどろみにふけさせる。キイチの裸足で歩いていく音が響いた。

「どうだった、あいつ」

「洋二ってんだが、どうにも感じが悪いな」

「突き落とすか」

「いや、もう少し様子を見てみようぜ」

かすかに聞こえるキイチと彼らの声。だが、俺にはもうどうでもよかった。

俺が地獄に落ちて数日が経った晩　現実の時間感覚で言うならば　のことだった。不審な音が響いていた。鼻で息を吐く音だ。かなり荒い。

俺は見張り番だったので、辺りの様子を伺ってみる。ここ最近二度ほど、下の連中の襲撃にあった。キイチが言っていた争いだ。

しかし、今回は壁を伝っているにしては、音の距離感が近づくこともなく、離れることもなかった。

ただずつと、短い息遣いと低い雄叫びのようなものが混じるだけだ。誰かが下で何かをやっているようだ。

ふと近くでのそつと頭が動いた。就寝中の多勢の中、起きたのはキイチだった。舌打ちをして下をねめつける。

「てめー、うるせえんだよ。なにやってんだ」

キイチは怒鳴った後、小便を穴に撒き散らした。

「ギャハハハ。いいもんだろ。黄金のスコールだぜ」

下からの音が止まった。キイチの顔がにやりとする。その瞬間、

またもハツハツという音が下から聞こえた。

「てめーふざけんじゃねえぞ!!」

キイチの声など気にもとめず、下では別々の声のやりとりが聞こえ始めた。どうやら、息を荒げていた人物に話しかけているらしい。このまま収まりがつけばいいが。

一瞬の静寂。

かと思つた次の拍子 爆笑の嵐が下で沸き起こつた。

「わかつた、わかつた。今から下りていって一人一人ぶち殺してやるからな」

キイチがわめいた。すると、次々と就寝中だった仲間が立ち上がる。額に傷のある一人の人物がキイチの目の前に来た。この場を取り仕切っている頭だった。

キイチが同調を促すように、怒りの心情を頭に訴える。

「聞いてくたせえ。夕霧の旦那。あいつら、ここを奪えないもんだから、こんな卑怯な手段にでやがったんですよ。信じられますかい。頭がどうかしてるとしか思えませんぜ。あんな下種ども見たことが……」

夕霧は拳を振り上げて何度もキイチを殴り始めた。俺には意味がわからなかったし、キイチにしてもまったくそうだろう。鼻梁から鼻血をたらして、顔面が赤く染まっっていく。

「うるせえのはお前なんだよ」

キイチは何度も弱々しく濁音混じりに謝っていたが、夕霧は容赦がなかった。キイチが動かなくなつたあとに、その後、何度も腹に蹴りをぶちこんだ。

肩で息を切らして、夕霧はよたよた歩き、やっと横這いになって眠りに入った。周りもそれに従つた。俺はキイチの様子を見てみたが、ひどい有様だった。

いくら再生能力があるからといっても、今度は死ねないことが恐怖となっていた。自由がなければ、意識があるのは無駄そのものだ。ああ、男の荒い鼻息がまた下から聞こえだした。あいつはいつた

い何をやっているんだろうか。

俺は甲高い声に起こされた。妙に縁の辺りで騒がしい。

「やめてくれ。落とさないでくれ、なっ頼む、お願いだ」  
年配の老人の声だ。

「夕霧さんの命令なんだ、よっ！！」

「うわああああー！！」

断末魔だった。時間を追うごとに音量が小さくなって、荒っぽく叩きつける音。

落としたやつは笑っていた。そいつらは数人だった。

他には、残りの連中が、五、六人寝ていたが、おそらく演技だろう。俺もそうだから。怖くなった。初めて突き落とされるというものが分かった。胃が締め付けられる。俺もいつか落とされるのだろうか。嫌だ。起きたら、夕霧に媚びを売ればいいのか。もしたら、奴は俺に何を要求するのだろうか。それもまた怖かった。

俺は天上を見上げた。俺は上から落ちてきたのだ。だとしたら、上に登ればここから抜け出せるのではないだろうか。

「なにしてんだ。洋二？」

キイチが不思議そうにたずねてくる。

俺は壁の状態を確認する。滑らかではないがかすかに凹凸がある。

「ここを登れば、出られるんじゃないか」

「はっ、あほかお前は。出られるわけーねだろ。昔、お前と同じこと考えていたやつがいたが……」

唇に手を当てたキイチは真剣な顔をしていたが、途端に口がほころんだ。

「途中で落っこちて下に真っ逆さま！！ここに入られるだけ幸わせなのによ、馬鹿な奴だったぜ」

げらげら笑うキイチに俺は疑問を持った。

「そいつはどんなやつだった？ それからは？」

「ああん？ そうだなあ……名前は雀とかいうふざけた名前のくせに、鷹みたいに目がぎらついているやつだったなあ。それから？

知るわけねーだろ、その後なんて。奴はもう闇の住人なんだからな」俺はここに来て初めて人間に興味を抱いた。そいつは今ごろどうしているのだろうか。真っ暗闇の中で何を考えているのだろうか。

「下はそんなに不幸なのか？」

俺は下に降りたことがない。なにわからない。

「いや、俺は落ちたことがねえからな。だが、考えてみる。真っ暗闇だぜ。人間の精神が耐えられるもんじゃねえよ。人間は光を求めちまうもんだしな」

「そうか、悪人なのか」

「人間の本質だよ。本質」

キイチは笑って真理めいたことを言った。かなり、インチキ臭い哲学者ぶりに、俺は笑った。キイチも気をよくして笑った。

馬鹿馬鹿しい。

中央の穴ぐらをじっと俺は見つめている。

縁に立っただけでも見えない。

しかし、下からはどうなのだろうか。逆光は俺達の姿を隠してしまおうが、光の存在自体は彼らにはよく知覚できるのではないだろうか。

彼らにとつては、月白のような、このうすぼんやりとした、太陽と比べるまでもない、この儂い光が、希望となっているのだろうか。光の中にいるのは薄汚い連中だというのに。

見えるはずのないものが見えた。縁の下の壁に青白い腕。俺が声を上げるまでもなく、誰かが叫んだ。

「襲撃だ!!」

縁の住人たちが全員下を覗いている。俺が見える範囲でも三人。さらに、後続があるようで声をかけあっている。

「お前ら、配置について蹴り落とせ。一人たりとも上がらせるんじゃないぞ」

夕霧の一声によって、全員の顔から緊張感がともなう。

俺の目の前で縁のあたりに指がかかった。俺はそれを引き離す。殷々とした叫びのあと体がひしゃげる音。嫌なものだったが、何度かの経験は俺の罪悪感を薄れさせていた。

下で励ましの声が聞こえる。

「あきらめるんじゃないぞ。最後まで踏ん張れ。あいつのために」

影の中に潜んでいるそいつが、いったいなんのことを言っているのか、俺にはわからなかった。わからないまま、また引っ掛けてきた指を引き剥がす。絶叫。ひしゃげる音。絶叫。ひしゃげる音。絶叫。ひしゃげる音。

訳がわからなくなってきた。俺は何をしている。何のために奴らを落としている。

「おい、こつちに応援をよこせ」

五メートルほど離れた場所で、複数の手が縁にたかっていた。仲間が踏みしだいたりしているようだが、なかなかうまく具合にいていない。

相手は一点突破にかけたらしい。

俺はその場で立ちすくんでいたが、周りの連中はそっちに行ってしまうた。一部分を除いて、ずいぶん騒ぎが収まったように感じる。俺の皮膚の感覚が遠い。これが夢だと思ってしまうのは何故だ

ろうか。

ヒタと指と何かが付着する音。俺はその音で、背中に怖気がはした。それから、いつかに聞いた、荒い呼吸音。

俺は言い知れぬ恐怖を抱いて、震え混じりに下を眺めた。

そいつはすぐそばの縁につかまり、二の腕を曲げて、こちらに顔を覗かせていた。

俺とそいつの視線が合わさる。

鋭い眼光、それはまるで鷹のようで、妥協という光がなかった。

殺される、と思った。こいつに俺は殺されるんだ、と思った。俺はゴミクスだ。畜生以下だ。

筋骨隆々の男が俺を弱虫にした。

「何やってる！！ そいつを落とせ」

夕霧が怒鳴った。

知らない。もう、あんたが勝手にやってくれ。俺はもう子供のようになめめめそ泣きたい。あんたも嫌だし、この男も嫌だ。

「どけっ、カス！！」

夕霧が俺を突き飛ばして、あの男の前に陣取った。男は片腕を縁の上に乗せて、後は下半身を打ち上げるのみだった。

夕霧が男の顔を踏み抜こうとした。顔面の中央部あたりだろうか。しかし、男は難無くひよいとかわしてしまった。それから、夕霧の浮足をつかんで、一気に下へ引きずり降ろした。全く躊躇いがなかった。

俺は夕霧の目を見た。大きく見開かれたまま、一言も発せず、彼は落ちていった。暗い暗い、深く深くの闇へ、人形みたいに落ちていった。

俺は目の前に、筋肉質な男が立つのを黙ってじっと見つめていた。

だって、何をすりゃあいいんだ。夕霧は下へ真っ逆さまだし、他の連中もこっちに来ない。

男の目は鋭くて、体格がよくて、俺はなにをされても、文句など

言えない。自分から落ちろと言われれば、俺は落ちる。たったそれだけだ。

男の手が動いた。

壁に向かって。

なぜか、その男が馬鹿に思えた。

今、先ほど、この男が、俺の、引いては他の連中の命運すら握っていたとうのに、意味がわからない。

俺は近づこうとした。その男に。邪魔立てをするためではない。声をかけようとした反動だ。

すると、鷹のような眼光がさらに鋭くなり、俺は一步も動けなくなった。手の甲の血管が浮き彫りにさせ、奴は壁をよじ登っていく。男の行動は馬鹿げていた。俺もそれを夢見ていたはずなのに、実際に男がそうしているのを見て、自分がなんとも馬鹿馬鹿しいことを考えていたことがわかった。

歓声が上がった。俺たちからではない。下の住人たちからだ。

「雀、頑張れよー、落ちてくんじゃねえぞ」

「お前は、俺たちの希望だ」

「雀！！ 俺たちの分まで、本物の光を」

彼らがそう言って、次々と壁から手を放して、自ら落ちていった。これ以上ないくらいの満面の笑みだった。地獄に相応しくない穏やかな表情だった。彼らはお互いに健闘を讃えあって、残った俺たちは何一つわからなかった。彼らは何を考えていたのか。

男が暗がり消えていく。燐光のような淡い光も届かない上部へ消えていく。

何だ、これは。

いったい、何なんだ、これは。

もう、ずっとまともには寝ていない。地獄に来てから月日という感覚は麻痺していたが、あの男が登っていくのを見て、生前の世界なら何日経ったのだろうと、やたらに考えている自分がいる。

縁の上でうろろして、自分でも落ち着きがないのはわかってい

る。

だが、どうしようもない。

心の中で焦燥が拡がり、いったいあの男はどうしているのだろうか、今はどのあたりにいるのだろうか、そればかりが俺の頭の中で浮かんで消えて、浮かんでは消えて、浮かんでは消えて、俺は気が狂っている。地獄に来て、こんなにも心苦しいことはなかった。嫌なことは眠りに任せて考えないようにすることができた、誰かと喋ることで不安も紛らわすこともできた、だが今はだめだ。頭から追い払えない。あいつのことが。雀のことが。

「よお、元気なさそうじゃねえか。洋二」

キイチが俺の隣に座った。こここのところ機嫌がいい。夕霧が去った後の後釜を担ったからか。元々、人付き合いがいい奴だし、周りの奴も快くキイチに従った。

俺は天上を見上げる。見えもしない誰かを思っ

て。

「なあ、あいつどうしたと思う。俺はずっと聞き耳立ててるんだが、落ちてきた心配がしないんだ。あいつ、ひょっとしてここから抜け出したのかな」

キイチが微笑を浮かべた。やれやれとでも言いたげだ。

「また、雀か？　んなわけねーだろ。お前がこっくりこっくりしている間に落ちたんだよ。ここから抜け出した奴なんざいるわけがねえよ」

「そうか」

納得した。なのに俺は天上を見つめる。俺は何かを期待している。そんな俺の物分かりの良さ以上のものを。

「襲撃だ！！」

誰かが、叫んだ。キイチの目付きが変わる。俺もゆっくり立ち上がり、撃退に加わろうとする。

「ああ、いい。お前は無理すんな。ここんところ一睡もしてないんだろ。それに数がめちゃくちや少ないからな」

キイチがニカツと笑う。月光のような光加減に映し出されるは二人。一人は面識がないが、残る一人は見知った顔だった。

「おい、キイチ、なにポケットとしてやがるさつさと俺を引き上げる」  
夕霧が縁のふちに手をかけて歯を剥きだしにする。

「おやおや、誰かと思えば夕霧さんじゃないですか。しかし、うゝん、聞けませんよ」

「お前、誰に向かって口聞いてんだ」

「夕霧にだよ。もう、お前の時代は終わったんだ、よ!!!」

何度となくキイチが夕霧を蹴りつけて、顔面を血だらけにして落とした。

残る一人はへつらうかのような笑みを浮かべて、自ら手を離し消えていった。

俺はそれから天井を見上げていた。キイチはお手上げ宣言をしてから何も言わない。俺がどれだけ正常から遠ざかってても、あいつからは遠ざかれない。俺はまだちゃんと聞いていない。あいつが落っこちる音を。今、思えば、下の住民も俺と同じかもしれない。だから、夕霧に従って襲撃してこないのかもしれない。

皆が眠りにつく。見張り番はいつも俺が買ってでている。ずっと起きているのだから、他の誰かがする必要はない。

しかし、俺の意識は限界に近づいていた。眠らないといっても、体は疲れている。意識が薄れる。ほんの少しだけ、意識を麻痺させよう。

ガコツ!! ギイイイイ!!

俺は飛び上がった。今まで聞いたことがない音だ。何だろうか。俺は天井を見る。何の変哲もない暗闇に一粒の光があった。

俺の口は半開きだった。美しかった。あの光が俺を馬鹿にさせる。鋭利な刃物のように、尖った光の輪だ。闇を照らすのではなく、闇を切り裂く光。

「キイチ、起きろ!!」

俺はキイチの体を揺さぶる。キイチがぼやけた声をだしているとき、また先ほど聞いた重々しい音がする。光が弱くなった。闇に吞まれていく。

「おい……どうしたってんだ」

キイチがまぶたをこすって俺に聞いた。

「光が見えたんだ……本物の光が……」

俺は頭上を見上げていた。

「まだ言っているのかよ。そんなのあるわけねーだろ」

しかし、俺にはあの光こそが全てだった。真実だった。暗闇の向こうにある光。そこに俺の心は奪われていた。

凹凸のある壁に手をかけて、その感触を確かめる。今にもやはりだす気持ちを抑えて、俺の頭の中で光への階段が出来上がっていた。ここはもう地獄ではない。

(後書き)

369 (ミロク) / ひかり

眩しくて眼を開けてられない

けど、その先をどうにか見てみたい

あなたは何も見せてくれない

けど、暗い時も何処かに触れたい

何もかもが白く染まるほど

僕を照らす光は明るく

逆光にぼやける未来の輪郭

徐々に近づく      そこに近づくと

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3395h/>

---

一粒の光

2010年10月8日15時17分発行